

てんさい
「天祭とは何だ」
今に生きる原始太陽信仰

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問 柏村 祐司



昭和27年に行われた
お天祭の記念写真



天棚の前で祈禱呪文
を唱和する

今年の七月十二日(日)、田河内町にあたる東下ヶ橋の天棚が一般公開された。公民館敷地内の収蔵庫に組み立てたまま収蔵されている地元のお宝である天棚が、久しぶりにお披露目されたというわけである。この天棚は、組立式二階建てで屋台のように華麗な彫刻を施したものである。慶応二(一八六六)年にでき上がったもので、当代随一の彫り物師富田宿(現栃木市)の磯辺兵衛の手になる彫刻が施され、大型で造りもしっかりとした大変立派なものである。

天棚とは、天祭とか天念仏といわれる行事の際に用いられる中心的な施設である。

ところで天祭であるが、福島南部から栃木、茨城、埼玉東部、千葉北部の各県にまたがって分布する。特に栃木県は広い範囲に渡って行われ、形態も地域により異なり、研究者から注目を集める。

県北東部の八溝山間地や西部の

足尾山間地では、山の頂上のご神木の傍らに祭壇を設けて天祭が行われる。八溝山間地では、春先葉煙草の苗移植の頃に、足尾山間地では麻の種まきの頃に、一家の主たちが山に登り、ご神木の前に供物を供え葉煙草、あるいは麻の無事収穫を祈る。その後、ご神木の回りを八溝山間地では、ナンマイタンポ、足尾山間地ではセンドー・マンドーなどと唱えながら回る。なお、天祭というのは足尾山間地で八溝山間地では天道念仏という。

大田原市羽田沼、那須塩原市百村では、四本の丸太で櫓を組み祭場を設けて天念仏が行われる。櫓には二方所棚を設け、上部の行人棚に梵天を掲げ大日如来を祀り、下部の棚はお囃子の演奏場となる。行事は三日三晩行われ、斎戒沐浴し白装束に威儀をただした行人が朝昼晩、行人棚にあがり、太陽をはじめとする神仏に風雨順調・五穀豊穡を祈願し、次いでお囃子の演奏にあわせ梵天の回りを回る。

栃木県中央部一帯では、東下ヶ橋のように組立式の彫刻を施した二階建ての施設が用いられる。二階部分が祭場で日天(太陽)・月天(月)を描いた掛軸を吊るし、その前に祭壇を設け、一階部分は囃し方の演奏場としたものである。行事は、三日三晩行われ、朝昼晩ごとに斎戒沐浴した行人が祭場上がり、太陽をはじめとする神仏に風雨順調・五穀豊穡を祈り、次いでお囃子の演奏にあわせ行人や若衆が天棚の周囲を回る。

天祭とは、もともと太陽に、風雨順調・五穀豊穡を祈願したところの原始太陽信仰である。山に登り櫓や天棚を設けるのは、太陽に少しでも近い所で願いを届けたいとする素朴な思いからである。

気象観測が発達した今日でも近い将来の天候を予測することは難しい。ましてや科学の未発達な時代にあってはまさに神だのみであった。あつという間に来て、甚大な被害をもたらす台風は、今もって最も厄介なものの一つである。そこで農民は村を上げて、春先や秋ぐちに風雨順調・五穀豊穡を太陽をはじめとする神仏に懸命に祈ったのである。

近年、たくさんの経費や人手を要することから天祭行事は衰退した。そうした中、東下ヶ橋では、せめて天棚だけでも見ていただき、お天祭の何たるかを理解し、あわせて先人たちの生き様について思いを巡らしてもらいたいと公開を実施したのであった。